

かりでなく AH 症例の経過観察に有用であると思われる。

11) 小腎細胞癌に対する Nephron Sparing Surgery (NSS) における超音波切開凝固システム Harmonic scalpel (HS) の利用

富田 善彦・小池 宏	（新潟大学医学部） （長岡赤十字病院） （泌尿器科） （泌尿器科）
水澤 貴樹・笠原 公太	
谷川 俊貴・高橋 公太	
森下 英夫	
玉木 信	

目的； Harmonic scalpel (HS) は組織の切開と凝固が同時に行える超音波装置である。HS の Nephron Sparing Surgery (NSS) に対する有用性を検討した。

対象・方法；10例の腎細胞癌 (RCC) 患者の腎実質切開にハンドピースタイプの HS を用いた。

結果；腎実質からの微細な出血はよくコントロールできたが、弓状動脈以上の太さの血管は止血できなかった。切除面の血管等の同定は非常に容易であった。

結論；HS は RCC に対する NSS で有用であると考えられたが、HS のみの完全な止血は不可能である。

12) 膀胱腫瘍に対する細径端子による超音波検査の有用性

富田 善彦・小林 和博	（新潟大学医学部） （泌尿器科）
車田 茂徳・笠原 隆	
斎藤 俊弘・谷川 俊貴	
木村 元彦・高橋 公太	

目的；消化管や血管内病変の描出に用いられている細径端子 (MUP) の有用性を尿路上皮腫瘍に対して検討する。

対象・方法；膀胱癌16例，尿管癌合併1例の17例に対して経尿道的に MUP (15 and/or 20 MHz, with AlokaSSD 550) を用いてを検査し，病理学的浸潤度と比較した。

結果・考察；従来の経尿道的超音波検査と異なり，1. 直視下に操作できる，2. 細径であるので端子の自由度が高い，3. 尿管内の操作も可能，の利点があった。反面，4例では大きい腫瘍のため超音波の透過が不十分，腫瘍が膀胱頂部に存在し，進達度診断のための適切な操作面が得られない等の問題もあった。MUP 使用で表在性と診断した1例では組織学的に筋層浸潤があったが，

残り12例では双方の進達度診断は一致していた。以上より MUP 使用による経尿道的超音波検査は有用と考えられた。

13) MRSA 保菌者に対する膀胱全摘除術の経験

小松原秀一・内藤 雅晃 (新潟県立がんセンター泌尿器科)
渡辺 学・北村 康男

最近の2年間に膀胱全摘除術を行った患者のうち，7例が術前の検査で MRSA が陽性であった。尿路変更は回腸導管5例，尿管皮膚瘻2例，疾患は膀胱癌5例，尿膜管癌1例，尿管癌膀胱浸潤1例であった。細菌検査は入院時に尿を，TUR (生検) 後，膀胱全摘前に尿，鼻腔，咽頭，大便について施行した。入院時の尿は6例で陰性，1例は未検査であった。膀胱全摘術前は尿陽性5例，鼻腔7例，咽頭4例 (2例不明)，便6例であり，尿感染は TUR 後と考えられた。術前の除菌には5例で，ポピドンヨード含嗽，ST 合剤，鼻腔陽性者にはムピロシン軟膏，便の陽性者の一部には VCM 内服により，4例で菌は消失した。2例は検査結果判明が手術前日だったため VCM 点滴。以上の6例は術後 MRSA 陰性であった。菌消失のなかった1例は VCM を使用した。術直後は陰性であったが，再手術を契機に肺病変 (ARDS) を発症した。MRSA 保菌者は適切な除菌により，術後は良好に経過するものと考えられた。

14) Wilms 腫瘍の当科経験例について

山崎 哲・新田 幸壽 (新潟市民病院 小児外科)
内藤 真一

1988年から1997年の10年間で，当科では4例の Wilms 腫瘍を経験した。全て Favorable histology であり，stage I が1例，II が2例，IV が1例で，いずれも NWTS-3 のプロトコールに準じ，治療を行った。stage II の1例が，化学療法終了から2年後に肺転移，局所再発を生じ，現在も治療中であるが，他の3例は，転移，再発を認めておらず，現在経過観察中である。Wilms 腫瘍は，術後の系統だった化学療法と放射線療法により良好な予後が得られるようになってきた。しかし肺照射に対し，治療をうけた患者のびまん性間質性肺炎，胸郭形成不全，呼吸機能障害等，その QOL が問題となって来ている。我々の経験した stage IV 症例は，両側肺転移，下大静脈血栓を来しており，プロトコール